

# 熱性けいれんについて

中村内科小児科医院

## 熱性けいれんとは？

生後6か月～5歳ごろまでの、乳幼児期におこる発熱に伴うけいれんで、1歳半～2歳ごろが最もおこりやすいです。

意識を失う、呼びかけに反応しない、手足に力が入る、ガクガク・ブルブル規則的に体が動くなどの症状がみられます。

良性の病気で、通常は特別な治療は必要なく、後遺症の心配もありません。日本人では7～11%の子どもたちにおこると言われています。

多くの場合は、38℃以上の発熱に気がついてから24時間以内にけいれんが起こります。

けいれんが、

- ① 体の一部分のみにおこる（焦点発作）
- ② 15分以上持続する
- ③ 24時間以内に複数回繰り返す

このうち1項目でも該当する場合を複雑型熱性けいれん、1項目も該当しない場合を単純型熱性けいれんと区別しています。

複雑型熱性けいれんは、他の病気（髄膜炎や急性脳炎など）の可能性を評価するために、検査や入院が必要になる場合があります。

## けいれんした時はどうしたらよいですか？

まずは、あわてずに布団の上など安全な場所に横向き、または仰向けでも顔・首を横に向けて寝かせてください。

発作が続いた時間、どのようなけいれんか（手足の様子、眼はどちらを向いているかなど）を観察してください。

口・舌を噛んでも大きな問題となることはありませんので、けいれんしている最中に口には何も入れないようにしてください。もしお子さんが吐いてしまった場合は、吐物がのどにつまらないように注意してください。

けいれんが数分以内に自然に止まり、その後意識がしっかりと回復した場合は、あわてる必要はありませんので、落ち着いて病院を受診してください。

けいれんが5分以上続く、短い発作が繰り返し起こる、体の一部分だけがけいれんしている、意識の回復がみられない場合などは、緊急で処置・検査が必要となることもありますので、救急車を呼びすぐに病院を受診するようにしてください。

熱性けいれんの原因は？

はっきりとはわかっていませんが、子どもの脳が未熟であるために、発熱をきっかけに脳の異常な興奮が起こり、けいれんしてしまうのではないかとされています。通常は成長に伴ってけいれんはおこらなくなります。

熱性けいれんは再発しますか？

再発率は約30%とされていて、約60～70%の子どもたちは、生涯に1回だけのけいれんで終わるといわれています。

- ① 両親・兄弟・姉妹のいずれかが熱性けいれんをおこしたことがある
- ② 初めてのけいれんが1歳未満だった
- ③ 発熱から1時間以内でけいれんをおこした
- ④ けいれん時の体温が39°C以下だった

これらの、いずれかに当てはまるお子さんでは、再発の確率は2倍以上になるといわれています。

てんかん（熱の有無に関わらずけいれんする病気）と関係がありますか？

熱性けいれんをおこした子どもたちの90%以上は、てんかんを発症しません。

- ① もともと発達・神経の病気がある
- ② 両親・兄弟・姉妹にてんかんの家族歴がある
- ③ 複雑型熱性けいれんであった
- ④ 発熱から1時間以内に熱性けいれんをおこした
- ⑤ 3歳以降に熱性けいれんをおこした

これらに当てはまる場合は、てんかんを発症する可能性が少し高い（2～10%）といわれています。

熱性けいれんがてんかんを引き起こしたのではなく、てんかんの患者さんの症状が熱性けいれんで始まったとも考えられます。

解熱剤は使用しても大丈夫ですか？

子どもたちに使用される一般的な解熱剤はアセトアミノフェンという薬です。解熱剤を使うとけいれんを起こしやすくなるという説には、明確な根拠がありません。発熱時には、まず首やわきなどを冷やして、さらに熱が高い、つらそうなどの様子があれば、決まった範囲で解熱剤は使っていただいて大丈夫です。

熱性けいれんの予防薬はありますか？

熱性けいれんの予防薬としては、ダイアップ® (ジアゼパム) という座薬があります。有効性については諸説あり、眠気やふらつきなどの副作用にも個人差があります。一般的には、複雑型熱性けいれんを起こした子どもが適応とされています。眠気が強く出ること、けいれん後の意識状態の評価が難しくなる可能性など、メリットだけではなくデメリットもある薬ですので、対象となる患者さんは相談の上、慎重に考えたいと思います。